

しえんしゃ してん しんさい きょうくん かた
支援者の視点から震災の教訓を語る

はんしん あわじだいしんさい けいけん
～ 阪神・淡路大震災の経験から～

たくと みぞぶち ゆうこし
拓人こうべ 溝渕 裕子氏

だい ぶ
(第1部)

ねん がつ にち
2008年6月3日

がくしゅうかいこうえんろく
ヘルパー学習会講演録

じりつせいかつ たちかわ きょうかい しゅさい
自立生活センター・立川ノヘルプ協会たちかわ主催

阪神・淡路大震災で被害がひどく報道でも取り上げられていた兵庫県神戸市長田区から来ました、溝渕裕子と申します。今日はよろしくお願ひします。私は四国の香川県出身で、阪神・淡路大震災のときは神戸にいたのではなくて、香川にいて震度は4くらいでした。何事も無く過していたら、海を渡った神戸では、大きな地震があったということで、神戸にボランティアに行きました。

関東では次に地震があるかもしれないということで、かなり防災意識も高いと認識しておりますので、みなさんとディスカッション形式で一緒に考えていきたいと思ひます。

私は、1995年4月に震災ボランティアとして香川から神戸に入ったのですが、当初は1ヶ月のつもりだったのですが、気がつけば13年経ってしまいました。私はそれまで全く違う仕事・活動をしていたので、神戸に入って、たまたま、現在はえんぴつの家たくと、拓人こうべという名前に変わっていますが、当時は被災地障害者センターという市民のボランティア団体で、そのなかで初めて障害のある方と出会って、ほんとにわけのわからないまま活動を始めたのがきっかけで、何も知らないものが行って13年も続けてきました。

私の所属している旧被災地障害者センターは95年の2月に発足しました。兵庫県下の40箇所の関係団体の作業所・デイサービスセンターなどで構成されておりました。それまで、障害者運動や制度要求などをしていた活動していたグループが震災をきっかけに集まって結成されました。そして、顔の見える関係で草の根の活動ということを大切にしながら、障害者の方の救援活動をしていました。直後は水汲みや瓦礫の撤去、全国から駆けつけたボランティアの派遣を行いながら、どうしても一般の避難所に入れない障害者に対して、独自に公園にプレハブを建てて、避難場所を設置したり、作業所などの人々のネットワークづくりや勉強会やイベントなどを行ってきています。当団体の代表は障害者で「障害者による

救援・復活活動」ということで活動を行ってきました。というのは障害者だから、助けられる側ということではなく、障害者も自ら復興に参加し、自分たちで救援活動を行いました。またお金も何も無いところからスタートしましたので、全国からのカンパや財団の助成金など、支援グッズのがつつくんというものがあまして、それを販売しながら、活動資金にしておりました。そのがつつくんというのは、木村拓哉がロングバケーションというドラマの中で着てくれて、一躍有名になり、その時は潤いましたけれど、それも一時的なものでした。今でも全国からのカンパなどを頂きながら活動を続けております。

私たちが被災地で活動していく上で気づかされたことは、被災地での障害者の方が置かれているかなり困難な状況、トイレ、お風呂、避難所にいけない、外にも出れない、介護者がいない、あらゆるできないことが震災があって、クローズアップされましたが、それは震災に関わらず、今までであった問題が明らかになりました。そこで救援活動が落ち着いたら活動をやめるのかというのではなく、それをきっかけにして、震災の前の状態に戻すのではなく、明らかになった問題を解決するため、継続的な活動を今もなお続けています。その後、NPO法人を取得したり、ヘルパー派遣事業を行うようになりました。

では震災のときのことで、以前も西宮のメインストリーム協会の玉木さんが来られてお話をされたということなので、重複する部分があるかと思いますが、ご了承下さい。当時13年前はメールや携帯もあまり発達しておらず、地震直後は情報などの通信網が遮断されました。とにかく電話が繋がらず、情報が全然入らず、特に被災地神戸のなかでは震災が起きたのか、爆弾が落ちたのかという感じでみんなかなり混乱していました。理事の大賀重太郎が姫路という神戸から50キロくらい離れたところに住んでいて、被災が少なく、そこから連絡をするということで電話は

通じなかったけれど、なぜか FAX だけは通じたので、名簿をもとに被災地の人たちに安否確認のために FAX で送り続けました。逆に大阪や東京からも姫路には連絡がとれたので、姫路を拠点にして、報道などの被災地の情報を送ってもらいながら、被災地の状況を把握していました。大賀はもともと障害者運動を 20 年以上していたので、それまでのネットワークを生かしながら県外の東京や大阪のパイプ役となりながら活動をしていました。

理事長の松村が設立したえんぴつの家は、もともと障害者が養護学校ではなく地域の学校に行こうとか、施設ではなく地域で暮らそうという運動をしてきた法人です。そこで関わっていた名簿をもとに家庭訪問をして安否確認を行いました。これはとてもじゃないけど、自分たちだけではできないので、労働組合や全国から駆けつけたボランティアなどと一緒にその当時の名簿で約 800 件、安否確認に回りました。安否確認といっても、交通手段がないので、自転車部隊を結成したり、時には暴走族のバイク部隊で回ったり、いろんな形で被災地を回りました。自宅にいますと言っても、もうどこかに避難しているか、病院に運ばれたからどこにいるのかわからない、次は避難所に行ってみようと、避難所に行ってもいない、じゃこの人はどこに行ったのか、追跡調査をしました。生きていますか死んでいるのかという状況を調べ回って、安否確認を行いました。

今だとどうなるんでしょうね？特にこちらの東京のほうは人口も多いし、神戸の場合は早朝で自宅にいた人が多かったのですが、これがもし昼間だったら全然状況が変わっていたらうし、もし外出先や電車のなかだったりすると、自宅の名簿があって行っても誰もいなかったりして、状況というのは発生する時間によってもきっと全然変わってくるだろうと思うと、あの時と同じ状況で次に地震がきたときに安否確認に行けるのかはわかりません。各拠点の作業所などもあり

ましたが、その職員たちもみんな被災しながら、家の人をおいて、メンバーさんの安否確認に走り、いろんな形で奔走しました。

しかし、とてもじゃないけど、被災地神戸の中だけで救援活動をまかなうことは無理な状況で、とにかく情報も入らないし、交通手段もなく、何もない状況で、大阪や東京のもともともあるネットワークを使って、大阪に救援本部、東京では DPI などが中心に被災障害者支援実行委員会というのを立ち上げてもらいました。人・もの・金・情報が混乱し、全国からボランティアにきたいというのもありまして、被災地の電話で受けていたら、本当に助けてくれという電話を受けられない状況になるので、人(ボランティア)の受け入れ大阪で、きっとかなりお金が必要になってくるから、お金は東京で集約して集めるとか、神戸のなかだけで完結するのではなく、各団体が役割分担して、被災地を応援していこうという形を作っていました。神戸のなかでもかなり混乱しているなかで、全部をしていたらみんな倒れてしまっていたらと思うます。そういう意味では、自分の地域の近くのネットワークも大事ですし、ちょっと離れた全国的なつながりというのも普段から持っておかないとなんかあったときに助けてもらえる、協力しあえる関係を作っておかないといけないと思います。

その当時、こちらの立川の自立生活センターの方々も来ていただいて、かなり助けていただいたと聞いております。以前こちらにいらっしゃった高橋修さんも 5 月か 6 月くらいに被災地に来て、励ましをいただいたりしたことをよく覚えていません。神戸の中では避難場所が作れなかったのが、被害が少なかった大阪の福祉センターのようところに避難場所を設けました。そこに神戸で被災した 7 人の障害者とその家族が 2 ヶ月あまり避難生活をしました。そのボランティアのコーディネーターも大阪の団体にしてもらって、どうにか避難生活ができました。このように混乱のなかで、

各地に応援してもらってどうにかこうにか震災直後を過ぎていきました。

そういったなかでもやはり亡くなられた関係者の障害者もおられまして、脳性麻痺の障害者で代表福永のもと連れ合いさんが、文化アパートで古い住宅に自立生活をしていて、震災で全壊し、車椅子の方は1階に住むことが多いかと思いますが、1階は押しつぶされてしまって、数日後に瓦礫の下で亡くなって見つかったということがあります。その人だけではなく、何人かの仲間たちが地震によって命を失っています。そういう意味で生き残ったメンバーは、亡くなった仲間の命の重さをすごく感じて「どうにか生き抜くぞ」と、とても必死でした。

神戸で助かった、生き残った障害者の人たちは、公共の避難所は、直後にすぐにいっぱいになり、入れなくて、とてもじゃないけど避難生活はできなくて、今はバリアフリーも普及していますが、13年前はバリアーだらけで、段差が多く、トイレもほとんど和式でした。トイレがあっても排泄物が盛り上がり、水が流れない状況でした。トイレがあったとしても健康な人すら使えないという状況でした。だから水分なども控えて脱水症状を起こしてしまい、逆に病気になった方もいました。あとトイレの臭いですね、とにかくトイレの近くに避難せざるを得ない人たちはそこにいられないくらいとても大変でした。学校の校舎もエレベーターはなくてもあっても電気が止まり使えず、避難場所は2階ですと言われても、とても車椅子ではいけない状況であきらめたり、知的障害の方は大勢の人の中に落ちていて過せないで、最初から避難所をあきらめた方も大勢いました。

中には助け合いという言葉も聴かれましたが、やはり人間しんどいとき助けることもできるますが、逆にさらに弱い人にいくときがあって、車椅子のままで体育館に上がるうとして、「汚いからやめてくれ」と言われて、とてもじゃないと、

避難所を後にする人もいました。体育館の狭い更衣室のなかに、知的障害の人が家族で避難していて、かなりストレスもたまって不安定になってしまったという方もいらっしゃいました。避難所がないので、地震で倒壊していつ余震があつて家がつぶれるかわからないという恐怖のなかで、夜だけでも避難所で過したいと行こうとする人も多いのですが、それでも避難所のなかにいられず、震えながら自宅で過さざるを得ないという人も大勢いました。

一人で自宅で寝ていて、怖い何かあったら助けてくれというボランティアに対する依頼もありました。私たちも何度かお伺いして、泊まり介護で体位変換をするというわけではなく、一緒に寄り添うということもありました。また、体育館の中で過すこともできずに、仮設住宅もなかなか当たらずに、そのうち学校が再開になると生徒たちから「お前ら、はよ出て行け」と心無い言葉をかけられた高齢の障害者の夫婦が、べつにいたくっているわけではなく、行くところがないと、胸のうちを話してくれました。そういうときになんとか、普段から大変なのに、地震によってますます大変になったと聞いています。

仮設に移れたとしても、交通の便が悪く、郊外のほうに仮設がたくさん建てられ、当たってもとてもじゃないけど住めないということで、仮設をあきらめた人もいました。仮設に行って不慣れた生活を強いられた方もいらっしゃいます。仮設住宅自体広いものではなく、狭いお風呂で障害者の方は介助者と一緒に入れない、ユニットバスみたいなものでした。壁は当然、薄くプライバシーは守れず、避難所よりはましですが、知的の方は大きな声をだしたらどうしようと、なかなか仮設は安住したところではなかったです。プレハブですから、夏は暑くて、冬は寒いという今は仮設でもエアコンがつくようになったと思うのですが、当時は仮設にはエアコンもなかなか付けてもらえずに、仮設に当たって入ったのですが、体温調節

が難しい人で、体調を崩して何度も交渉してどうにかつけてもらえたのです。仮設に当たって、1ヶ月くらいは過した方も、段差もあるし、なかなか仮設での生活は難しいということで、自分で違う賃貸のアパートをどうにか探して移った方もいらっしやいました。

新潟のときは地域ごとに仮設住宅に入れるように工夫して、神戸の経験があるからそうしたんだと思いますが、神戸のときはとにかく当たった順番から入れていき、まったく別々の地域の人が同じ住宅の中において、全然知らない人たちで地域の今まであったつながりがなく、近所のおっちゃん、おばちゃんではなく、全く知らないコミュニティのなかに突然いれられ、それまでのつながりが断絶させられるなかで、孤独死ということもありました。

では、13年経って今はいいのかということではなくて、原発が火事にもなった去年2007年7月に新潟の中越沖地震があったのをみなさんもご存知かと思いますが。私も行かせてもらったのですが、神戸のときと変わっているところと、そうでないところがあったのですが、やはり体育館や学校の避難所では過すのが難しい障害者の方でほぼ全壊のようなヒビが入ったグループホームから学校の避難所には一旦行ったが、そこではとてもじゃないけど過せないということで、壊れかけたグループホームに戻ってで過している方もおられました。やはり情報が入らず、どこの避難所に行っているかというのわからずに車の中で、何日間も過した、娘さんがダウン症で、お母さんが、車椅子障害者の方という人もいて、3~4日間くらい車の中で過して、その後やっどどここの避難所に行けという情報が入ったのですが、避難所ではなかなか過せず、ダウン症の娘さんが声も出なくなってしまうと、やはり、壊れかけた自宅に戻って生活をされていました。

また、仮設が当たってよかったねと、一見バリアフリーで玄関からスロープもついて入りやすい

形になっていたのですが、その人はどうしても車で移動をしていて、仮設住宅の中はいろいろわけが仮設住宅は国持ち物だから、勝手に車を入れてはいけませんみたいな決まりがあるようで、その人が車で家に横付けして、戸を開けて家に入っていたのですが、その車の横付けもさせてもらえなくて、そのあと、何度も交渉してどうにか車を入れてもらえるようにはなったのですが、いろんな壁を乗り越えなくてはいけないことがあるというのは、神戸から何年かしてもあるというのは、私はちょっとショックでした。だからつき起きてもまた同じ事をやるのかと思っています。

震災のときに神戸の中にもいろんな小規模作業所などがあって、東京もそうかと思いますが、たいがいお金がなくて貧乏で、多くの作業所はいい物件には高く入れてなくて、安く古い賃貸を借りていて、多くの作業所が被害に遭いました。95年1月17日のこの日にオープンする予定だった作業所が全壊になってしまい、とてもショックでした。本当に多くの作業所が被害を受けました。朝だったので、そこにメンバーさんが来ていたわけではなかったのですが、大丈夫だった作業所やデイケアなどは、メンバーの人や地域の高齢者の為の避難場所になっていたところもありました。また炊き出しとかトン汁やカレーを作ったりなど、普段から作業所はバザーなどをよくしていたので、古着もあって、地域の人に率先して提供していました。いままでは、あそこの団体に変な人が出入りしていると、見ていた人もこれをきっかけに交流が深まったというのがありました。その作業所の方たちといろいろお話しして、自分たちが別に特別なことをしたというわけではなくて、普段からしていることをただけやと。逆に震災がなくてもいつも困難な状況になる障害者だからこそできることがあるんやということでしたんだということばがとても印象的でした。だから本当に健常の方だと、普段何も思わないことが、障害者の方だと普段から大変だったりしてエレベーターもな

ければ、電車に乗るのも大変で、普段から大変やからできることがあるんだよということで、頑張っていたのが印象にあります。

またいろんな公園に仮設住宅が建ちました。ある作業所はすぐ近くの仮設住宅の支援に入りました。やはり高齢者の方が多く、こういうトイレにしたほうがいいとか、段差をなくしてスロープにしたほうがいいとか、アドバイスを障害者だからこそできました。それですごく使いやすい仮設住宅に変えていきました。そういう支援をしていった作業所もあります。いまでもその方たちと仮設の同窓会を続けています。

それから17市という震災を忘れないというイベントを毎年している作業所もあります。作業所も多く被災してボランティアをたくさん受け入れ、逆に普段そんなにボランティアが来ることがなかったのですが、困惑していたのですが、へんな話震災があって、そういういろんな人とつながったほうがいいと、気づかされたという声も多く聞かれました。いままでは自分のところの作業所の商品を売ることが多かったのですが、そうではなくていろんな作業所で得意な商品をあわせて一個の組み合わせセットを作って販売をしたり、作業所同士で元気を出すプロジェクトをして、作業所同士のつながりも濃くなりました。

私がいま拓人のなかでやっているのが、知的障害の方の活動を主にしているので、その状況を少しお話いたします。私が一番印象的なのは、Kさんとの出会いで、重度の知的障害の方です。この当時作業所と定時制高校に通ってました。その方が一人で通える練習をしていた矢先に震災に遭い、交通手段がほとんど止まってしまう一人で行くことが困難になってしまいました。電車が通らないし、代替バスが迂回して走ったのですが、Kさんに「そこは電車が通ってないから、バスに乗って行ってね」と言っても、やはりなかなか理解が難しく、ちょっとパニックになりまして、それに対するボランティアでの送迎を

拓人でしてました。その頃は、神戸市に知的障害の方の制度、ホームヘルプやガイドヘルプがなく、ボランティアでしか対応ができなかったのです。「ごんた」なKさん、「ごんた」というのは、神戸弁で「やんちゃ」という意味です。次から次へといろんなボランティアの人がきて、とまどって大声をあげたりとかして、いろんなことがあってなかなかボランティアさんとうまくいかずに大変でした。

そこでKさんのこれからを考えたときに、多くのボランティアはいずれ帰ってしまうので、継続的に知的障害の方への支援をつくらないといけないということで、ガイドヘルプの制度化を要求する運動を起こしました。神戸市との交渉をしたり、ピープルファーストという知的障害の当事者団体があって、その方たちと署名運動をしたり、神戸市も含めて勉強会を開催しながら要求運動をしました。ただ制度を作れといっても、「金がないんや」と言われておしまいなので、逆にこのようなガイドヘルプの手法があるということをつきつけるために、全国を回って調査・研究をした報告を神戸市に提言しました。こういうやり方があるからこういうふうにやってみませんかと逆に提案する形で出していました。神戸市も金がないといいながら勉強会など参加してくれていたのですが、震災復興で常にお金がないと、結局実現まで7年かかりました。お金がないと言いながら、その当時神戸市はすぐに神戸空港を作る計画を立ててましたし、もちろん道路とかも大切なのですが、なかなか障害者の方の生活支援にお金を使わないという姿勢がその当時も今でもありまして、すごく理不尽だなと思いながら活動をしていました。

そのころ知的障害の方から多くあった依頼というのが、とにかく交通手段の変化がありましたので、送迎のニーズがかなり多かったです。Kさんだけではなくてほとんどの方々が、電車が動いてなかったら車で、車も通れなかったら自転車

で二人乗りして行ったりしていました。地震にあった人は揺れへの恐怖心を持った人もいて、一人でなかなか外出できなくなって、ボランティアが迎えに行き、外に出られるという人も大勢いました。やはりいつもの町の風景が全然違って、何もかも違うのでかなりストレスもたまっていて、ストレス解消に遊びや外に連れて行ってほしいという依頼がすごく多かったです。避難所だけいたらこもってしまうので、連れ出してくださいということで出かけることが多かったです。入所施設に行かざるを得ない方もいました。避難のために行ったはずがそのまま入所になってしまった方もいました。正確な人数は把握してないのですが、たくさんいたと報告を受けています。

震災前から障害を持たれた方だけではなく、震災で障害を持たれた方も大勢いました。私が出会った方は、ピアノが頭の上に飛んできて、生きる確率3%と言われた方がどうにか奇跡的に回復はしたのですが、どうも脳のCTを撮ってもお医者さんが診ても何も無いのに、以前普通に生活していたはずが、言葉が出ないとか、何かしようとしてもできなかつたりとか、表情がなくなったということで、なんだろうと言っていたら、震災から6年くらい経って名古屋のお医者さんが、高次脳機能障害ではないかということで、やっと診断が下ったという方がいました。この方もそれまで中学生でしたが、何年間も学校にいかずに、学校に行き始めたのですが、今まではヘルパーなどがいなくても行けてたのが、道も全て記憶としてはなくなってしまうと、それをボランティアが送迎をしていたという方もいました。今も高次脳機能障害で一般就労とかもなかなか難しい状況ですが、いろんなことをしながらだいぶ表情とかも明るくなってきています。

次にサバイバースエリアという緊急避難の場所を作ったのですが、公共の施設を障害者のために使わせてくれと言ってもそれはできないと、拒否されたので、それなら自分たちで作るしか

いということで、公園の中にプレハブを建てて、そこに避難していました。そこは全国からのボランティアも一緒に暮らしていました。そこに私も1年くらい生活していました。いろんな方がいて、Aさんは母子家庭で知的障害の方でした。お母さんは震災でダンスに足を挟まれて骨折し入院してしまい、お母さんが入院している間に、暮らす場所がなく、その頃施設もいっぱい、拓人の避難場所においてくれということで来られました。約2ヶ月間ボランティアと一緒に過ごしました。今はお母さんと一緒に生活しています。その頃本当にいろんなボランティアさんがきて、東京のボランティアさんがすごく気に入って、東京に行きたいと言われていました。

次のBさんですが、24時間介護が必要な方です。自立生活をして30年というベテランさんだったのですけれども、障害者だけでなく、介護者も被災してしまうので、介護者が来れないということで、サバイバースエリアに避難してきました。そこにいけば全国から来たボランティアが泊まっているので、一緒に介護をしてもらうことができました。その当時大阪のほうに避難所を設けていまして、そちらに行くことも出来たのですが、Bさんは地域にずっとこだわって自立生活をされてきたので、被災地神戸で仲間と居続けたいということで、残って生活していました。

次のCさんは、震災で自宅が全壊して怪我をして、病院に入ったのですが、かなり言語障害があつて、病院がその言葉をなかなか聞き取れず、なぜか大阪の入所施設に入れられ、Cさんもずっと地域にこだわって生活してきた方なので、そういうふう勝手に自分の意思とは関係なく連れて行かれたということにすごく怒りを持っていました。その後、病院や役所相手に訴えながら、施設を出てからサバイバースエリアでボランティアと一緒に避難生活をしました。

Dさんは重度の重複障害の方で、自宅が全壊。お母さんが高齢で初期の認知症が出ていて、親子

で一旦大阪の方に避難したのですが、その大阪の避難所も閉めることになり神戸のほうに戻ってきて、公園の中のプレハブで生活をしていました。ただやっぱり認知症というのは、周りの状況がかなり変ったりすると、進行して息子のDさんに暴力があったりして、言葉がほとんどないため、「痛い」とか言いえなかったので、ボランティアが隣の部屋で何かしていないか、叩く音がしたら部屋に行って「お母さんそんなことしたらあかんやん」と言ってみ守りに行くという状況が続けていました。いまは、お母さんも数年前に亡くなられたのですが、そのあと、支援者と一緒に家を再建して、24時間介護をつけて生活をしています。

あとEさんです。精神障害の方で、アパートが全壊して、病院に行ったあと、やはり病院ではなく仲間の支援を受けて暮らしたいということで避難所に来られました。しばらくその避難所で暮らしたり、仲間の家に泊まったり、ちょっと調子が悪くなると自分で病院に入院しながら、仮設が当たって仮設という全然違った環境の中で、症状が悪化してその仮設にもいられなくなって、また入院をしたり、友達の家を渡り歩いたりという不安定な生活をされました。今は自分でアパートを借りて暮らしています。

こうしてみると障害者の方が、被災するだけではなく、介護者もしくは家族も被災したり怪我をして、じゃ誰が自分を助けたり、介護したり、できるのかなとイメージをもってもらいたいと思います。公共の避難場所では、避難生活が難しかったので、こういう場所に来たのですが、本当は特別な場所を作らなくても、公共の場所で過ごせるような環境や周りの支援があれば本当は良かったのではないかと思います。

そのあと、震災直後の状況から変わってきて、県外から来ていたボランティアがみんな帰らないといけないということで、今後継続して支援が必要な方は地域につなげる活動を始めました。よく言われたのが、ボランティアが行政の肩代わり

しているのではないかと、被災者の自立を妨げているのではないかなど、よく言われましたが、つなげる制度があればつなげるし、もし制度がなければ、その人が生きるために何が必要かというのを訴えかけて、ないものはつくらないといけない、作る運動を主体的にしていました。行政を期待していても何もできませんし、なかなか動けないのです。震災直後は、神戸の場合でも福祉事務所などが救援物資の受け入れなどを担当していたみたいで、被災者、障害者の家庭訪問であるとか、そういうことができなかつたそうです。だからたくさんの方に聞き取りをしたのですが、「行政の人は誰も来てくれへん」、「来てくれたのはあんただけや」言われました。そういう意味で、行政に対しては、自分たちで必要だと思うことは提言して、作っていかないと、待っていても出てこないというのはあります。それからネットワークづくり、人と人とのつながりというのが、普段からつくっておくことが必要で、何かあったときに自分のことを想像してくれる人がどれだけいるのかということをやちょっと考えてみたり、もし自分に誰が助けに来てくれるのだろうかとか、でもあの人も被災してしまつたらどうなるのだろうか、ちょっと想像してみることが大切で、ちょっと仲良くして、ケンカしないでおこうとか、とにかくそのつながりが大事だということを実感しました。

いま現在ですが、あれから13年経って、自立支援法にともなう、事業所が介護派遣を行うようになっていっています。そういう中でヘルパー派遣をしている事業所がどこまで救援活動ができるのか、するのか、障害者の方を救援するのは誰なのだろうか、そういうことを考えていかなければいけないと思います。ただ障害者を救援すると言っても、ヘルパーも事業者も同時に被災してしまうので、どうなっていくのだろう。災害が起きたときに、ヘルパー派遣というのが可能なのだろうか？検討していかなければならない課題が山積みだと思います。神戸の時にはヘルパー制度という

のがほとんどなかったのですが、また今とは状況が違いますが、逆にいま神戸で次に来たときに、シミュレーションなどどういう風に対応できるのかというのをきちんとできていないのが、反省としてあります。神戸も13年というのが長いようでまだまだ短くて、まだ被災者は震災を背負っているから、次何か起きたらどうしようということが、まだまだ考えられないのかなということもあります。でもやはり考えておかないと、また同じことの繰り返しで、せっかく生き延びた命さえ、落としてしまう可能性も再度認識してやらないといけないと思います。そういう意味ではこちらの東京や関東ではすごく熱心なので、逆にこちらでどういうふうに行われているかというのを今回聞いて帰って神戸の参考に逆輸入できたらなと思っております。

あと大事だと思うことは、いろいろ中国でも大規模な地震があって、私も想像つかないくらい大きな地震だと思うのですが、あそこまで大きくなかったとしても、想定以上の出来事が災害時には発生して、マニュアルがマニュアルでなくなるこのほうが多いと思います。地震というもの自体は止められない天災ですが、それを人災にしないということが大事だと思います。だから特別なことよりも普段のみなさんが住む町をいかに普段から住みよい町にしておくかということが、それは町のバリアフリーということだけではなくて、人のつながりを作っておかないと、本当に災害が起きたときに、弱い町になるだろうなと思います。私たちの活動としては、この活動が社会を変える運動なんだと、救援活動をしていましたが、ほんとの意味で社会を変えていかないとなんの意味もないということで取り組んでできています。日頃のつながりってでは何なのだろうと、ただつながりが大事だと言っている聞き飽きている言葉かも知れませんが、じゃそのつながりというのは一体何なんだろうと、もう一度考えて行くことも大事だろうと思います。つながりがないとあそこで誰

かが車椅子の人が死んでいるとか、知らなかったらきっと埋もれたままかも知れないし、もちろん近くにいた介護者が元気であれば来てくれたのですが、神戸のときも助けに来てくれたのは、近所のおっちゃん、おばちゃんとかで、あそこになんか足の不自由な人がいたなということで助けに来てくれたりとか、気にかけてくれたりしてくれて、そういうつながりとかもすごく大事だ実感しました。先程も言いましたが、神戸の場合は、全ての活動は神戸でできなかったのが、大阪、東京などの遠くの支援団体も巻き込んで活動していました。そういうことも含めてのつながりが大事だし、また作業所であるとか横の連携も障害種別や団体の枠を超えて、つながっていくことが大事ではないかと思えます。神戸の場合だと生き残った命をとにかく大事にしないと、亡くなられた6,437名の方がうかばれないし、何においても命が一番大切で、そういうことを考えながら防災ということに取り組んでいけたらいいと思っています。私の経験で言うと具体的なお話ができずに、もししたらみなさんの期待に添えなかったかもしれないですが、私としては、震災の時にいろいろ揃えておくものとかもちろんあったらいいし、揃えておくべきだと思うのですが、そのことだけでなく、普段の当たり前の生活をどう作っていくかを大切にしながら、やるのが一番の防災につながると私は13年神戸での被災地に関して思ったことです。

しつぎおとう 質疑応答

参加者：私は視覚障害者で知的や身体、精神のお話はあったのですが、視覚障害者の方がどうあったかということ、視覚障害者の立場から言いますと、私は全盲です。全盲ですけれど今の自立支援法ですとわずかな時間しかヘルパーの派遣がないのです。そういうときにもし地震があった場合、避難所は知っていますが、そこまで行くことができません。2級から3級4級くらいの方は昼間だったら歩いていけるのですが、全盲のような私みたいな人が被害に遭ってそばに誰もいない、そしていま近所とのネットワークが必要だと言いましたね、行政は来てくれないと、ではその行政に対する働きかけは、これからもあると思いますけれど、全盲の仲間たちとよく言うのは、「地震がきたら私たちは死ぬのね」と、そんなこと絶対いやですよ、あとネットワークですが、ご近所の方、私の家の周りの方、みんな私よりも10歳くらい上の方ばかりで、こういうのはどうしたらいいのか、ほんとにほんとにそれが心配、

当時視覚障害者の人が困っている姿とかはなかったでしょうか？結局全盲の場合は、トイレ行くのも、食べるのも、またこういうレジュメを頂いても見えないので、いまお話を聞いただけの感想になってしまうのですが、何か視覚の人のことがあったら聞きたいと思います。

溝渕氏：すべての障害の方に添ってお話できなかったのですが、私も神戸で何人かの視覚障害の方に出会いました。とにかく直後のこともそうですが、道もガタガタで、それまでの風景とは全く違っている、いままで白杖で歩いていた方が、もうとにかく歩けなくなってしまったというお話を聞いて、そのガイドヘルプの依頼が多くありました。直後は紙などの媒体がないけれども、ラジオとかそういうところから情報入手したりしていました。それでもなかなか避難所などで物資をもらうのも大変だったと聞いています。そのあとマッサージのお仕事をされていた方なども多かったのですが、仮設住宅でのマッサージはだめだということで、いままで、自宅兼マッサージをやられていた方が、仮設での営業は無理だということで、生活にも困るということを知ったこともあります。聴覚障害の方もそうですけれど、普段から情報に閉ざされることが多く、災害時はさらに聴覚の方、視覚の方などは情報がなかったということで、すごく不便をされたというのを聞いております。聴覚の方なんかでも避難所に行っても、例えば物資が届きましたなどの案内の放送があっても、音が聞こえないので、もらいそびれることも多かったり、一見周りの人が見て、障害があるかどうかわからない状況だったりするので、助けてもらえなかったという方もいました。

次にネットワークですが、近所の人たちがお年寄りばかりで、自分が助けないといけない状況だと、どうしたらいいでしょうかね、高齢化社会ですし、視覚の方だと直後は一番助けないといいな

いと思うのですが、そういう場合だとちょっと離れたところにいっぱい知り合いがないといけないんじゃないだろうかとか、みなさんどうしたらいいんでしょう？神戸の場合だと、震災直後ではなくて、仮設住宅に入ったとき、優先枠という形で、高齢者や障害者ばかりが集中してしまいました。昼だと生活支援員などが相談や様子を見に来たりというのがあったのですが、夜は誰も来ず、障害者と高齢者の仮設になってしまって、かえって不安になり、若い人も一緒にしてほしいという声も聞かれました。新潟の場合ですと、山間部で近所といっても、遠くて救援も大変だったと聞いています。みなさんと一緒に考えてみたいと思いますけれども。

司会：神戸でも仮設住宅の孤独死ということがクローズアップされたのですが、昔からある公営住宅や都営住宅なども高齢者の方が多くて、隣にいても発見されずに3ヶ月、半年経ってから見つかるということが東京でもあります。それは災害というだけの問題ではなく、みなさんが日頃から、隣の町や市、隣の県など、もう少し視野を広げて友達や知り合いを作ることが大切だと思います。今日ここで溝渚さんとお知り合いになれたので、もし東京で地震があれば必ず助けにきてもらえるとと思います。そんな風にネットワーク作りができればいいと思います。

参加者：トイレのことが気になって、例えば中越地震の時も仮設住宅をいっぱい作ったと思うのですが、バリアフリー化になっていたのか、神戸の震災後にトイレの改善などなされているのかどうかお聞かせ下さい。

溝渚氏：私の知っている範囲ですが、私が行った新潟中越沖地震のときの、仮設住宅もみせてもらったのですが、神戸の時よりも少し広いとか、東北で雪に耐えられるように冬用の仮設だったり、

家族が多いと仮設の部屋を2~3つつなげたりなど、神戸のころより柔軟な対応になっていました。トイレだけを見てはいないのですが、避難所では、学校などが避難所になる場合が多いのですが、神戸のときは和式が多かったのですが、今は逆に洋式のほうが多くなっているの、少しはましになっていると思います。

司会：震災後、トイレが満杯で校庭などに穴を掘ってやっていたという状況になって、公園などにあらかじめ下水路をつくり、等間隔で穴を開けておいて、災害時、間仕切りをしてトイレにできるようにしたところもあります。都内などでも、マンホールの上にテントみたいなのを建てて、トイレになるなど、トイレの問題もいま少しずつ改善されてきていると思います。身近では東急ハズみたいなところに、小をすると固形になって捨てられるものなどあります。

参加者：病院や医療関係はどうだったのか、教えてください。

溝渚氏：震災直後で言いますと、先ほど事例でも出てきましたけれど、病院に行ったのですが、ケガして行ったのですが、とにかく野戦病院のような状況だったので、一日くらい廊下に寝かされ放置されたというケースもあり、なかなか機能しなかったようです。また薬の問題などあって、精神の方のなくては困る薬や透析の方だと、その機械が使えないなどが多くあって、神戸や大阪なかではとても対応できないということで、近くの町などにすぐに行って、そちらのほうで対応したり、薬を頼んで遠くから船で運んでもらったり、いろんなルートを使って、被災地に入れたという、なかなか大変な状況がありました。薬とかはなかなかたくさんはもらえないと思うのですが、それがないと発作が起きたりとかいんな方がいらっしやると思うので、その辺の

問題というのはいくらもまだまだ課題だろうと
思います。先ほどCさんは、言語障害がかなり重
度で、病院の方が言葉を聞き取れなくて、この人は
ようわからん人やから入所施設に連れて行くみた
いな形で、そのような処置をされたりして、ぜん
ぜん本人の意向を聞いてもらえなかったという、
病院側からしたら、そんな状況だったからし
ょうがないみたいなことを言っていたのですが、ど
んな状況であっても、本人の意思を無視されな
い状況が大切だと思います。

参加者：第一次避難場所など、小学校や公園な
ど公共避難場所にはいかなないと、食料や物資など
の情報が得られないと思うのですが、ヘルパーさ
んにとってきて頂くとかはできたのですか？
自宅から離れられなくて、家族も置いていけない
状況で、例えば第三者のヘルパーがその人たちの
分をもらいにいくとかはできたのですか？

溝渕氏：先ほど言いましたように、神戸の場合は
当時、知的の方にヘルパーなどいなくて、ボラン
ティアなどが、いろんな団体が入っていたので、
その方のお家に物資で何か足りないものはありま
せんかということで、配ったりとかはありました。
やはり避難所にはいかなないともらえないというの
があって、そういう意味では私たちの情報に入っ
ていないところで困っていた方はまだまだいたの
ではないかと思えます。それから新潟の
中越沖地震では、避難所に避難できない方たちが
自宅にいて、ただ物資が避難所に集まるので、物資
をもらいに行ったら、「あんたらここの避難所の
人間ちやうやろ」みたいな感じで言われたそうで、
行き違いかもしれませんが、物資をもらえなかつ
たということがあったり、もらって行くとしたら、
「泥棒するな」みたいなことで心無い言葉と言
われたりとかで、「もうあそこにはいけないわ」とい
う方もいて、物資をどのようにもらいにいけばい
いのか、実は確立されていないのではないかと思

います。ボランティアが物資を配って回って、「初
めてもらえたわ」という人がすごくたくさんいた
ので、この辺までは行政の方たちでは本当に無理
なので、いろんな人で助け合わないといけない
部分なのだろうなと思います。

参加者：貴重なお話ありがとうございました。
サバイバズエリアという緊急避難場所のお話
をされたのですが、災害が発生していつ頃建てら
れ、いつ頃までであったのかと、公園に作られたと
いうことで、行政との関係はどうだったのか、そ
の間取りはどのくらいで何人くらい入れるのか
具体的に教えてください。

溝渕氏：2箇所の公園を神戸市に交渉して貸し
てもらいました。先ほど言いましたように、公共
の避難所にいられない人たちのために、そのよう
な人たちが安心して避難できるところを作って欲
しいと提案したのですが、行政は作らなかったの
で、ではせめて公園を貸してくれと言うことで、
やっと借りることができました。そのプレハブも
行政から借りたものではなくて、大阪の労働組合
から調達してきて建てたもので、2階にボランテ
ィアが住んで、1階に障害のある方が住んで、軽
い間仕切りで、そういう意味ではあまり個人のプ
ライバシーとかはなかったです。もうひとつ、そ
れを95年の3月に1箇所建てて、それまで、大阪
や地域の避難所で過したのですが、そこでは
長時間は無理だということで、プレハブを建てま
した。もう1箇所は4月に建てました。その時に
精神の障害の方と重複障害の息子と高齢の母の
親子の方が入りました。ご家族の方が入りました。
個室の小さめ+な部屋がありました。そこで被災
された方たちは夏くらいまでは一緒に生活しまし
た。1箇所は、5月くらいには撤去し、もう1箇所
は障害者の方が地域に戻ったときに1年間ボラ
ンティアの活動の拠点としてありました。そこも
プレハブだったので、夏は暑く、冬は寒いという

状況でした。だから本当に体調をどう確保していくか、精神的な面も、いくら避難所とはいえ、すごくしんどい状況にありました。

参加者：ちょっとお聞きしたいのですが、たくさん課題がありますが、それらをどう向き合っていたらいいのでしょうか？

溝渕氏：そうですね、課題にどう向き合っていくか・・・、私たちもこの13年、1個1個クリアしていく問題があって、やっていて、まだまだ取り残している問題があって、先ほど言ったように、神戸の中でも次もう一度災害があったらどうするかという話、でききれていないなという部分はまだあります。普段の生活をどうよくしていくかということから、課題を整理していくとかクリアしていかないと、本当にできないのかなと実感として思っています。先程言ったようにこちらでされていることを神戸のほうに逆に持ち帰りたいなと思ってきましたので、もし、その辺についてもみなさんで意見を言ってもらえたら、ありがたいなと思っています。

参加者：私はいま一人暮らしをしていて、ヘルパー利用者なのですけれども、災害になったときを考えると、私は障害が重度なのでどのような心構えが必要なのか、とりあえず近所の人などに聞いているのですが、住宅の人とあまり話す時間がなくて、日頃の訓練がされていないので、防災について、いい意見を聞かせて頂いたらと思っています。

溝渕氏：防災に関しては、地震ではなくて、火事が起きることもありますので、周りが大変でなくても自分だけが大変なことになるかもしれないので、どうなんでしょう？何が起きたときに声を出して、助けてくれる人をどれだけ作っておくかということが本当に大切だと思います。いま言わ

れたように、火事が起きたときに、ヘルパーさんと二人っきりのときに、じゃどう私を助けさせるんだらうということなんかを考えないといけないと思います。

参加者：日中はほとんどヘルパーさんがいるのですが、夜はいない日もあります。そうすると自分が動けなかったりするんで、その時の心構えや対応を教えてください。

溝渕氏：何かあったときに、緊急のベルみたいなものはお持ちですか？

参加者：はい、持っています。それでも不安があるので言ってみました。

溝渕氏：それが有効に使えるか心配なのですか？ヘルパーさんだけでなく、近所の顔見知りみたいな人とかはいるのでしょうか？

参加者：声を出しても鉄筋なので、聞こえないのです。

溝渕氏：誰かアイデアを下さい。みなさんどうしましょうね。

参加者：私も当時、神戸に行きました。私は今昭島に住んでいて、昭島市は障害者・高齢者の要支援者登録を進めています。行政や民生委員や自治会に回しています。個人情報を含めての問題ですが、進めています。住宅については法律が変わったと思うので、アパートやマンションには、貸主が防災設備を着けるということで動いていまずので、大屋さんや市役所に聞いてみるといいかと思っています。

それからもうひとつ、グループホームなどでは、自分の部屋だけの消火栓（スプリンクラー）などがありますので、自分でつけるか、補助金を出し

てくれるように働きかけたりするのもいいかとおもいます。

溝渕氏：会場からこのようにご意見を頂き、ありがとうございます。

参加者：災害時、電動車椅子の電源の確保などどうされているのでしょうか？

溝渕氏：震災直後はなかなか電気が通じないところが多かったのですが、どうにか電気は通じて乗っていたのですが、直後は無理で手動の車椅子に乗ったり、とにかくウロウロできる状態ではありませんでした。逆に地震が起きて、電気よりガスのほうがライフラインとしては復旧が遅かったです。電気のほうが早かったです。もし次に起きたら、今日見ても電動の方も多いので、どういふうなものがあるのかなと、私も思いました。手動に切り替えて乗らなかつたらしょうがないとおもいます。どうでしょうか？知っている人がいたら教えてください。

司会：携帯酸素のポンペをいつも持っている方もいらっしゃると思いますが、そういう方はやはりすぐに被災地の外へ避難していました。電動から手動に切り替えて電源を確保できるところに避難したほうがいいかとおもいます。実際乗られている方は、予備の電源とかありますか？

参加者：当時神戸に行き、プレハブに泊まったり、ボランティアを送ったり後方支援をしていました。直後は「車椅子で来ても動けないよ、無理だよ」ということでやっと行けたのは3月半ば過ぎた頃でした。話を聞くと充電よりも車椅子で外に出るほうが難しいと、道路がへこんでいたり、今までと全然違う状況でした。4月行ったときも車椅子でへこんだ道路を歩くのはとても大変でした。

溝渕氏：私もだいぶ昔のことを話を聞きながら思い出してきました。マンションや市営住宅もそうでしょうけれど、5階6階、2階でもしょうけれど、エレベーターが止まりますから、電動車椅子なり、車椅子でエレベーターを使うことが直後は不可能になります。生き残っていたり、車椅子が大丈夫だったとして、次の手段というか、その場所から逃げる方法を考えないと、いけないのかなとおもいます。関係の方でも市営住宅の6階か7階にいて、ちょうど阪神高速道路が落ちて、その横の市営住宅に住んでいた方だったのですが、エレベーターが止まってしまって、マンションは倒壊はまぬかれたのですが、とにかく普段は電動車椅子で動いているのですが、家の中もぐちゃぐちゃでお母さんと二人で住んでいたの、家から出れないし、下にも降りられなかったの、知り合いの人が、2日後くらいに駆けつけてくれて、その人が結構体の大きな人で、火事場のくそ力でおぶって、階段で6階か7階くらいまで下りて、やっとそのときに水や食料を口に入れられたということを知っています。本当にその状況になってみると、車椅子も潰れているかもしれないし、そこから自分ができることも、厳しい状況もあるかも知れません。

参加者：情報の提供になるところですが、当時も何かわからないけれど、FAXが繋がったということでしたが、私は通信設備の会社に通っているのですが、家庭の固定電話というのは、家が停電になっても使えます。インターネットのIT電話というのが結構流行っているのですが、あれは家庭の電源がなくなってしまうと全然使えなくなってしまう。最近ラジオで、懐中電灯のようなものが付いたものも売っているのですが、手回しをすると1時間くらい、使えるというようなものなど、それと同じタイプのもので、携帯電話でもやはり結構電源がとれないという状況があ

り、携帯電話にも電源アダプターで差し込むと手回して、30分くらい通話ができるような、そういう装置は売っていますので、用意しておいたほうがいいのかと思います。

溝渕氏：ありがとうございます。あと直後は自宅の固定電話も不通だったのですが、公衆電話はつながったという話もすごく多かったのですが、、

参加者：まず安否確認の電話が殺到しますので、すぐに私ども会社では規制をかけてしまいます。公衆電話は第1次優先順位で、官庁や防災関係のところは優先順位を高くしておりますので、そういうところは規制をかけないようになっていますので、公衆電話は規制がかかりにくくなっていますので、使えます。

溝渕氏：いまはかなり公衆電話自体が減っていますよね。メール等というのはやはり無理ですか？

参加者：すみません。今は減らしているのですが、携帯を使ったりとかいろんなことを考えてください。近くに公共の施設などがあればそれを使ってください。それから今はその会社でも災害時に伝言サービスなどを行っているのですが、避難所でも真っ先に整備していきますので、ぜひそういうところでご自分のご家族などに連絡していただければと思います。メールも結構しんどい状況になります。

溝渕氏：貴重なご意見ありがとうございます。

参加者：質問ではないのですが、災害が起きたら、どんな人にとっても不安だと思うのですが、いま情報やいろいろ設備とか、どうだったら安心かなど、設備とかも大切だと思うのですが、災害時に自分がどうしたら一番安心かということとを想像して、私だったらやはりプリンター

があるとかそういうことよりも、人とのつながりがあったら一番自分として安心すると思うので、近所でも遠くでもどこであれ、何かがあったらいつでもどこでも「大丈夫」と気にしてくれる人、お互いに気に掛け合える関係というのが、一番大切だなと思います。ネットワークづくりとか、人間関係づくりとか、普通にお互いのことを気遣え合える人間関係作りというのが大切だと思います。ありがとうございました。

溝渕氏：本当にありがとうございました。神戸でもヘルパー派遣をしている、利用者の障害者の方で、いろんな事業所が24時間介護にほとんど入って、いろんな人が関わっていると思うのですが、じゃいろんな人が関わっているから安心かなと思うと、逆に何かあったとき自分たちのところに一番駆けつけてくれるのって誰なんだろうとこないだ不安を言っていました。そういう意味で、わりと浅く広くとかいうかいろんな人に関わることも大切ですが、どこか本当に通じあえるとか、何かあったときにあの人の顔が浮かぶとか、そういう関係性も、すごく大事ではないかと思います。人とのつながりというのは浅く広くも大事だし、お互いに思い合える関係性もまた必要だと思います。ぜひ、こちらの東京で防災に関する取り組みを神戸でまたぜひ学ばしてほしいと思います。

ちょっと宣伝ですが、大阪にゆめ風基金というのがあり、阪神・淡路大震災をきっかけにできた、被災障害者支援、災害が遭った時に障害者や作業所に支援を届ける活動をしているNPOがあります。その代表が小室等さんで、永六輔さんが副代表みたいな形でやっているのですが、障害者市民防災提言集を作ってまとめています。実際の阪神・淡路大震災や新潟など、いろんな人からこんなあったら便利だという意見を入れて作っていて、今日販売しております。1冊500円ですので、もし、よかったらぜひお買い求めください。すごく参考になるとと思います。よろしくお願ひし

ます。このゆめ風基金は、一人100円からでもい
いから少しずつお金を貯めていこうよという活動
をしている団体なので、ぜひこんな活動にも参加
していただいて、何かあったときには自分たちも
戻ってくるというか、被災地にお金を届ける活動
をしていますので、常に防災意識を高めていけた
らと思っております。本当に今日は私のつたない
話で申し訳なかったのですが、本当にありがとう
ございました。こちらの取り組みも私たちの参考
にさせて頂きたいと思っております。今日はどうもあり
がとうございます。